

複線径路等至性アプローチによる 大学生の自伝的推論の詳細な過程の検討

発行：2024 年 8 月 26 日
[掲載決定: 2024 年 7 月 25 日]

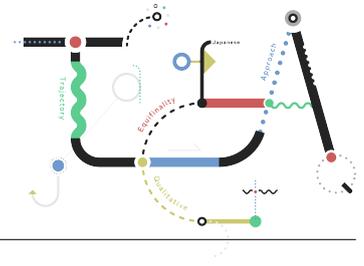
中園 佐恵子 (神戸大学大学院人間発達環境学研究科)

概 要

自伝的推論は自伝的記憶をライフストーリーにまとめる過程である。自伝的推論は自伝的記憶研究の分野で検討が進んでいるが、一つの記憶に対して自伝的推論が引き起こされるかという検討が中心であり、自伝的推論が出来事を意味づけ、ライフストーリーにまとめる詳細な過程は明らかになっていない。そこで、本研究は自伝的推論を検討するのに適した複線径路等至性アプローチ (TEA) を用いて自伝的推論の過程を検討した。過去の出来事を振り返ると回答した協力者の語りから、第二層の各時期で自伝的推論による意味づけが起こることで、第三層の自己の価値観・信念にまで意味づけが影響するような過程が見られた。一貫して同じ自己の信念・価値観で移り変わる過程を語る協力者と時期ごとに全く異なる自己の信念・価値観を語る協力者が見られた。過去の出来事を振り返らないと回答した協力者は自伝的推論の意味づけ自体が少ない場合や、自伝的推論による意味づけが自己の価値観や信念に影響した後、意味づけが変わらず、維持される協力者が見られた。また、辛い時期を乗り越えて成長するとポジティブに意味づける自伝的推論や、環境の変容を意味づける自伝的推論も新たに見られた。TEA を用いて分析をしたことで、詳細な自伝的推論の過程を捉えることができた。

キーワード：自伝的推論，自己，複線径路等至性アプローチ (TEA)

連絡先：中園 佐恵子 (E-mail: saeko.nakazono@gmail.com)



Detailed Process of Students' Autobiographical Reasoning Using the Trajectory Equifinality Approach:

Published: August 26, 2024

[Accepted: July 25, 2024]

NAKAZONO Saeko (*Kobe University Graduate School of Human Development and Environment*)

Abstract

Autobiographical reasoning is a process that constructs a life story through autobiographical memory. Autobiographical reasoning research has progressed in the field of autobiographical memory. However, a detailed process on the meaning of events and their integration into a life story through autobiographical reasoning has not been examined. This study used the Trajectory Equifinality Approach (TEA) to examine autobiographical reasoning. The analysis revealed that the narratives of participants who remembered past events showed a process in which meanings of autobiographical reasoning occurred and affected their beliefs and values. There were cases which narrate how the same beliefs and values changed, and cases which narrate different beliefs and values. The process of participants who did not remember events showed that there was a case of having few meanings of autobiographical reasoning and cases of maintaining meanings after they affected beliefs and values. This study also showed new types of meanings of autobiographical reasoning, such as getting through tough times and changing an environment.

Keywords: autobiographical reasoning, self, Trajectory Equifinality Approach (TEA)

Correspondence concerning this article should be sent to:
NAKAZONO Saeko (E-mail: saeko.nakazono@gmail.com).

問題と目的

1 ライフストーリーを構成する自伝的推論

自伝的記憶 (autobiographical memory) とは、自己にとって重要な意味をもつ個人的な出来事の記憶である (川口, 1999)。例えば、自分の人生に影響したような重要な記憶は自伝的記憶である。自伝的記憶はバラバラに並んで記憶されているのではなく、ストーリーの形式でまとまって記憶されているという特徴がある (佐藤, 2014)。

自伝的推論 (autobiographical reasoning) はハーバーマスとブルック (Habermas & Bluck, 2000) によって提唱された概念で、自伝的記憶をストーリーの形式にまとめる働きがある。

自伝的推論は特にライフストーリーを構成すると言われる (Habermas & Bluck, 2000)。ライフストーリーとは個人の人生に意味と統一性と目的を与える自己の物語であり、アイデンティティの基盤となるものである (家島, 2012; McAdams, 2001)。想起した出来事を意味づけ、出来事同士を結びつけて、ライフストーリーにまとめる、その過程が自伝的推論である (佐藤, 2008b)。複数の出来事の自伝的記憶を筋の通った一貫したライフストーリーにまとめる時間的一貫性、伝記の文化的概念、因果的一貫性、主題的一貫性の4種類の一貫性があると言われている (Habermas & Bluck, 2000; Habermas, 2011; 佐藤, 2008c)。時間的一貫性は出来事を時系列順に並べてまとめる方法である。伝記の文化的概念はその人の所属する文化で一般的に人生で起こると考えられる出来事についての知識である。因果的一貫性はある出来事がなぜ起こったかを意味づけして、まとめる方法である。例えば、人生が大きく変わる転機の出来事の意味づけをする場合に用いられる。主題的一貫性は複数の出来事を共通するテーマでまとめる方法である。

自伝的推論には自伝的記憶をライフストーリーにまとめるだけでなく、自伝的記憶を意味づける過程があることも指摘されている。この自伝的記憶を意味づける働きは自己と出来事を結びつける自伝的推論としてパスパティとウィークス (Pasupathi & Weeks, 2011) が示している。自己と出来事を結びつける自伝的推論には、自己の安定の意味づけと自己の変容の意味づけがあると

いう。自己の安定の意味づけには、なぜその出来事が起こったかを自分の性格など自分自身の内面にあると意味づける、ある出来事を自分らしい出来事だと意味づける、現在の自己の在り方に挑戦するような出来事が起こった時に、自分らしくないと見落とすという3つの意味づけがある。どれも現在の自己を維持するような意味づけである。自己の変容の意味づけには、体験した出来事で自己が変わったことを意味づけ、自己の見方を変える意味づけがある。佐藤 (2014) は幅広く自己と出来事を結びつける働きを示しており、ある出来事のおかげで成長したなど自己に影響したという意味づけ、現在の自分をよく表している出来事だと自己を定義する意味づけの2つの意味づけがあると述べている。自伝的推論は、自伝的記憶を意味づけ、ライフストーリーにまとめる過程であるといえる。

ただ、自伝的推論のパラダイムは確立されておらず、その検討は始まったばかりであると言われている (佐藤, 2008a; 佐藤・清水, 2012)。現在は自伝的記憶研究の分野を中心に自伝的推論の検討が進んでいる。佐藤・清水 (2012) は教職志望のある学生とない学生に教師の思い出を想起させ、教職志望のある学生の方が教師の思い出に活発な自伝的推論を行っていることを示している。佐藤 (2017) は成功した出来事の記憶と失敗した出来事の記憶を1つずつ協力者に想起してもらい、失敗した出来事より成功した出来事の記憶に対しての方が強い自伝的推論が引き起こされることを示している。このように、ある一つの記憶に対して自伝的推論が活発に起こるかどうかを調査した研究が中心になっている。

自伝的推論は出来事を意味づけ、ライフストーリーにまとめる過程であるが、この詳細な過程はまだ明らかになっていない。中園 (2022) は出来事を意味づけ、ライフストーリーを構成することで、自伝的推論は自己と自伝的記憶の両方に関連すると指摘している。自伝的記憶に対する自伝的推論の働きだけでなく、出来事を意味づけ、ライフストーリーを構成する自伝的推論の働きを検討する必要がある。自伝的推論の詳細な過程を調査するには語りを用いて、個人がどのように出来事を意味づけ、複数の出来事をまとめているのか調査する必要がある。

自伝的推論の過程を詳細に検討するため、本研究において検討する自伝的推論の働きを以下のように定義する。自伝的推論とは出来事を意味づけ、ライフストーリーを構成する過程である。特に自伝的推論が意味づけをする働きとしてはパスパティとウィークス (Pasupathi & Weeks, 2011) が示した自己と出来事のつながりを取り上げる。

本研究では、自己と出来事を結びつける自伝的推論の詳細な過程を複線径路等至性アプローチ (Trajectory Equifinality Approach: 以下, TEA) を用いて検討する。

2 TEAによる自伝的推論の検討の意義

TEAは自伝的推論の過程を的確に捉えることができる分析的枠組みであると考えられる。TEAは、「歴史的構造化ご招待 (Historically Structured Inviting: 以下, HSI)」、「複線径路等至性モデリング (Trajectory Equifinality Modeling: 以下, TEM)」、「発生の三層モデル (Three Layers Model of Genesis: 以下, TLMG)」の三つの要素で構成される方法論的枠組みである。

HSIは対象選定の理論で、調査者が探求したい現象を経験した当事者として調査協力者を調査に「ご招待」という考え方である (福田, 2022)。

TEMは時間の流れを捨象せず、個人が経験する時間の流れを重視する分析手法である (安田ら, 2012)。非可逆的時間 (Irreversible Time) の流れを生きる人間には、ある行動を選択する径路が複数、存在するが、ある一定の状態に等しく至るポイントがあり、これをTEMでは等至点 (Equifinality Point: 以下, EFP) という。TEMでは等至点とともに、両極化した等至点 (Polarized Equifinality Point: 以下, P-EFP) も考える。P-EFPはEFPの補集合となる経験のことで、P-EFPを設定することで、調査者が関心をもつEFPを相対化することができる。径路が複数に分岐するポイントを分岐点 (Bifurcation Point: 以下, BFP)、ある行動を選択する上で必ず通るポイントを必須通過点 (Obligatory Passage Point: 以下, OPP)、EFPに向かう個人の行動を阻害する社会的な力を社会的方向づけ (Social Direction: 以下, SD)、EFPに向かう個人の行動を助ける社会的な力を社会的助勢 (Social Guidance: 以下, SG) として概念化している (サトウ, 2017)。このような概念ツールを用いて、ある人が不可逆的時間の流れの中でEFPに至る径路を可視化することができるのがTEMである。

TLMGはBFPで生じる径路の選択プロセスを三層で捉えることで、個人の自己変容を記述する枠組みである。第1層は個別活動レベル、第2層は記号レベル、第3層は信念・価値観レベルで人の自己変容を記述する (サトウ, 2022)。サトウ (2022) によれば、TLMGはもともと、開放系である生体が情報の内化と外化を行いつつ、変容する様子を捉えるためのモデルであったという。外界から入って来た情報は第一層で取捨選択され、

注意を向けられた情報が第二層に進む。第二層では記号が働き、情報が個人史と結び付けられる。この第二層では、状況を意味づけようとする場合に、記号が発生する (サトウ, 2017)。同じ状況でも異なる意味づけを行う、あいまいな状況を意味づける際に記号が発生する。第三層にまで到達した情報は個人の価値観と統合される。サトウ・福田・安田 (2015) によれば、TLMGを用いた分析を行うことで、個人の行動を表す第一層、個人史と結びつけ、行動変容を促したのが何かを記号レベルで捉える第二層、信念・価値観の変容を捉える第三層の三層構造で個人の行動と価値変容のプロセスを記述することができる。出来事を意味づける自伝的推論の過程を分析する観点から考えると、第一層で経験した出来事や起こった行動を記述し、第二層で出来事を意味づける自伝的推論の働きを捉えることができる。それだけでなく、第三層の価値観や信念に第二層で行った意味づけがどう影響するかも捉えることができる。自伝的推論がどのように出来事の意味づけを行い、どのように自己の価値観や信念に影響を与えるか、自伝的推論の過程そのものを非可逆的時間の流れの中で検討することができる。

個人の時間の流れを重視し、三層で自己の変容を捉えることができるTEAは出来事を意味づけてライフストーリーにまとめる自伝的推論の詳細な過程を的確に分析することができる優れた唯一の分析的枠組みであると考えられる。

方法

1 調査協力者

自伝的推論は青年期に発達する (Habermas & Bluck, 2000) ので、幼い頃から現在までの自己を語るすることができる青年に、HSIを行い、大学生・大学院生10名 (男性5名、女性5名) の協力者を得た。平均年齢は21.4歳であった。10名という協力者は「1/4/9の法則」から考えると、径路を類型化できる事例数である (安田ら, 2012)。

面接を始める前に、簡単なアンケートを行い、協力者が普段からよく過去の出来事を振り返る傾向があるのか調査した。過去の出来事をよく振り返るか、よく振り返るのはどのような出来事か、思い出せる限りで最も幼い頃の思い出を尋ねた。アンケートの結果と協力者のプロ

表1 協力者のプロフィール

協力者	性別	過去の出来事の振り返り	よく振り返る出来事の時期や内容	最初初期記憶の時期と内容
大学生A	男性	よく振り返る	様々な出来事	幼稚園・保育園の頃：先生に怒られたこと
大学院生B	女性	よく振り返る	小学生のサッカーの練習、雨の日の教室、帰り道の夕焼け	幼稚園・保育園の頃：2歳に保育園の友達と目が合ったこと。
大学生C	男性	よく振り返る	高校～大学の面白かった出来事	小学生の頃：友達と学校で走っていた
大学生D	女性	よく振り返る	引越した先の幼稚園が厳しかったこと。	幼稚園・保育園の頃：幼稚園で毎日、竹馬の練習をさせられたこと。
大学院生E	女性	よく振り返る	小学校・高校の友達のこと。	幼稚園・保育園の頃：おたふく風邪をひいたこと、家族旅行のこと、家の中で父と話していること。
大学生F	男性	振り返らない	なし	幼稚園・保育園以前の頃：おむつを替えてもらっているところ。
大学生G	男性	振り返らない	なし	幼稚園・保育園の頃：虫取りをしたこと。
大学生H	男性	振り返らない	なし	幼稚園・保育園の頃：登り棒で遊んでいた。冬場は朝に乾布摩擦をやっていた。
大学生I	女性	振り返らない	なし	幼稚園・保育園の頃：友達と外で遊んでいた事。
大学生J	女性	よく振り返る	小学生の頃のこと。	幼稚園・保育園以前の頃：旅行や遊びに行ったこと。

フィールを表1に示した。

2 調査手続き

語りのデータは次項で説明する手続きで分析し、一人一枚ずつTEM図を作成した。まず、4名の協力者が過去の出来事を振り返らないと答え、6名の協力者が過去の出来事をよく振り返ると答えた。更に、TEM図の特徴から協力者は表2のように分類することができた。

本研究では、自伝的推論を促す半構造化面接を行った。始めに最も若い頃の思い出を語ってもらい、そこから現在まで、どのような自己だったかを振り返って語っ

てもらった。最後に過去から現在までの自己を比べて、変わったところ、変わっていないところ、過去から現在までの自己につながりがあるかといった自伝的推論に関連する質問を尋ねた。最後に面接を受けた感想などを自由に語ってもらった。面接実施時期は2016年7月から10月であった。

3 分析手続き

面接の内容は事前に協力者に承諾を得て、全てICレコーダーに記録した。その記録は全て、逐語録に変換した。以下の手順で逐語録の分析を行った。逐語録を何度

表2 協力者の分類

過去の出来事の振り返り	分類	該当する協力者
振り返る	対人関係の変化を語る	A
	時期ごとに思いついた自己を語る	C, D, E
	辛い時期があり、それを乗り越えたと肯定的に意味づけたことを語る	B, J
振り返らない	対人関係の変化を語る	H, I
	落ち着いた自分・大学の専攻決定	F
	自己を振り返ることができない	G

表3 TEM 図の用語と本研究での位置づけ

用語	意味	本研究の位置づけ
等至点 (EFP)	複数の経路が収束するポイント	現在の自己に至る
両極化した等至点 (P-EFP)	等至点の補集合	現在の自己に至らない
分岐点 (BFP)	複数の経路に分岐するポイント	
必須通過点 (OPP)	多くの人がある行動を選択する上で必ず通るポイント	
社会的助勢 (SG)	等至点に向かう行動を助ける社会的な力	
社会的方向づけ (SD)	等至点に向かう行動を阻害する社会的な力	

も読み、語られた出来事、意味づけごとに分割した。それぞれに名前をつけ、コードとした。コードにはなるべく協力者の語った言葉を使用した。得られたコードに対して、TEM を用いて分析した。本研究では、【現在の自己に至る】を EFP として設定し、そこに至る経路を描いた。また、分析が調査者の関心のある事柄のみに偏らないように EFP を相対化する目的で、【現在の自己に至らない】を P-EFP として設定した。更に、複数の経路に分岐する出来事を BFP、多くの協力者が必ず通るポイントで EFP に至る経路にとって重要な出来事を OPP、EFP に至るよう助ける社会的な働きを SG、EFP に至るのを阻害する社会的な働きを SD として設定し、分析を行った (表3)。最後に全ての協力者の TEM 図について解釈が偏らないようコードを読み返し、適切にコードが TEM 図に反映されているかを確認した。

4 倫理的配慮

本研究は実施に先立ち、神戸大学大学院人間発達環境学研究科の研究倫理審査委員会に申請し、承認を得てから実施した。協力者には、事前に研究の目的、参加は任意であり途中で参加を中断しても不利益がないこと、研究により得られた逐語録などのデータは研究終了後破棄されること、プライバシーに配慮したうえで学術雑誌などへ発表することがあること、研究の内容について、いつでも研究責任者に問い合わせられることを説明し、承諾した者を協力者とした。プライバシーに配慮し、協力

者の語りは研究結果に差しさわりのない程度に、協力者が特定されないよう、ある程度の変更を加えた。

結果

表2で示した協力者の TEM 図の分類どおりに以下に示した。「過去の出来事を振り返る」と回答した協力者の TEM 図は「対人関係の変化を語る」A さんを図1に、「時期ごとに思いついた自己を語る」C さん、D さん、E さんを1つの TEM 図にまとめて図2に、「辛い時期があり、それを乗り越えた」と肯定的に意味づけたことを語る」B さんは図3に、J さんは図4に示した。「過去を振り返らない」と回答した協力者4名を1つの TEM 図にまとめて、図5に示した。

また、TLMG による分析結果について、豊田 (2015) を参考に第一層を TEM 図で表し、OPP や BFP に沿って時期ごとに区分して第二層と第三層の変容過程を示した。文中では、TEM 図のコードは【 】で示し、TLMG の第二層と第三層は〈 〉、協力者の語りは「」、補足説明は () で示した。EFP は現在の自己に至るとして示しているが、現在の自己の状態は協力者ごと異なるため、各事例で示す。複数の協力者をまとめた TEM 図は豊田 (2015) を参考に、類似点や共通点を中心に1つの図にまとめた。

1 過去の出来事を振り返ると回答した協力者の事例

(1) 対人関係の変化を語る A さんの事例

a) 第 1 期：特定の人と付き合う A さんの EFP は【誰とでも話せる】、P-EFP は【一人である】であった。最も幼い頃の思い出は先生に怒られたことを語った。その思い出以外、先生に怒られたことがなかったため、子どもの頃の自分は真面目で、幼稚園の頃の幼なじみといった仲の良い特定の人としかしゃべれないタイプだったと語った。「特定の人としかしゃべれなかった」と振り返った。そこで第二層は〈特定の人と付き合う〉とした。

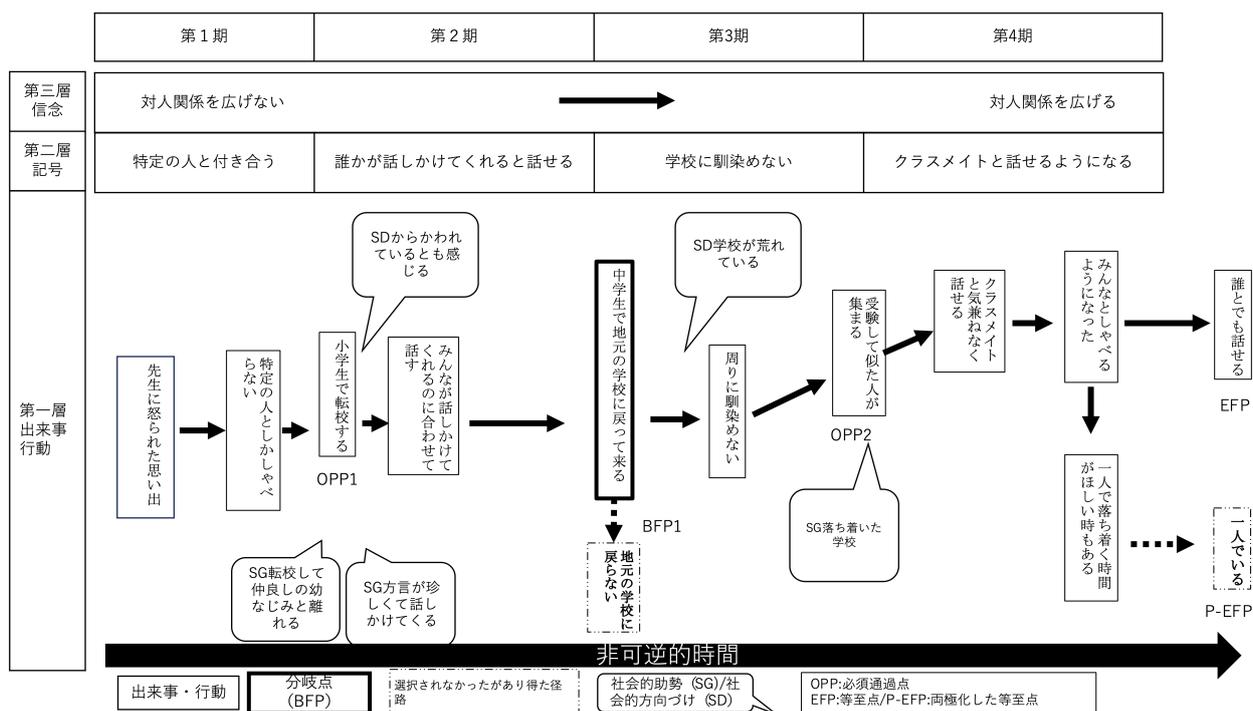
b) 第 2 期：誰かが話しかけてくれると話せる 小学生の高学年になると、A さんは転校をすることになった (OPP1【小学生で転校する】)。仲が良かった幼なじみとも離れることになった (SG【転校して仲良しの幼なじみと離れる】)。転校先の小学校では A さんの方言が珍しかったようで、クラスメイトが頻繁に話しかけてくれた (SG【方言が珍しくて話しかけてくる】)。それに

じるうちに、よく話すようになった。一方、からかわれていると感じることもあった (SD【からかわれているとも感じる】)。誰かに話しかけてもらえれば、話せると A さんが捉えているため、第二層は〈誰かが話しかけてくれると話せる〉とした。

c) 第 3 期：学校に馴染めない 中学生になると、再び引っ越しをして地元の学校に戻ってきた (BFP1【中学生で地元の学校に戻って来る】)。以前にいた学校と違って学校が荒れていた (SD【学校が荒れている】)。そのため、学校に馴染むことが難しかった。第二層は〈学校に馴染めない〉とした。

d) 第 4 期：クラスメイトと話せるようになる 受験をして高校生になると、同じように受験をして集まったクラスメイトであるため、話の合う人が多く、馴染みやすかった (OPP2【受験して似た人が集まる】)。落ち着いた雰囲気のある学校であった (SG【落ち着いた学校】)。「明るくなったなと思います」と A さんは自分のことを語った。クラスメイトと気兼ねなく話すことができるようになり、誰とでも話せるようになったと語った。一方で、一人で落ち着く時間が欲しい場合もあることも語った。第二層は〈クラスメイトと話せるようになる〉とした。このように A さんは対人関係の在り方の移り変わ

図 1 A さんの TEM 図



りを語ったので第三層は〈対人関係を広げない→対人関係を広げる〉とした。

(2) 時期ごとに思いついた自己を語る C さん, D さん, E さんの事例

C さん, D さん, E さんは一貫して自己について語るというよりは時期ごとに様々な自己について語っていた。三人の径路は見やすくなるように一つの TEM 図にまとめた。

a) 第 1 期 C さんの EFP は【内気・頑張りすぎない】, D さんの EFP は【プライドが高くない・完璧でなくていい】, E さんの EFP は【活発】で, C さんの P-EFP は【社会的・ストイック】, D さんの P-EFP は【プライドが高い・完璧主義】, E さんの P-EFP は【活発ではない】であった。最も幼い頃の思い出は C さんは友達と学校で走っていたこと, D さんは幼稚園で毎日、竹馬の練習をさせられたこと, E さんはおたふく風邪をひいたこと, 家族旅行のこと, 家の中で父と話していることを語った。第 1 期ではそれぞれの子どもの頃について語った。C さんは子どもの頃はすぐ怒り, 短気であったこと, D さんは保育所で自由に遊んでいたこと, E さんは友達とよく遊んでいて活発だったことを語った。そこで第二層は C さんは〈短気〉, D さんは〈自由に遊ぶ〉, E さんは〈活発〉とした。

b) 第 2 期 C さんと D さんは子どもの頃の状況が変化したことが語られた (BFP1【子どもの頃の状況から変化する】)。C さんは子どもの頃は短気ですぐ怒っていたが, 小学生から内気になり, 優しくなった。「理性が付き出した」と語った。D さんは自由だった保育所から厳しい幼稚園に移った。幼稚園では竹馬の練習など, やらなければならないことが増えた (SD【幼稚園になって, やらないといけないことが増えた】)。また, あまり友達もできなかった。その後, D さんは中学受験をすることになり, 塾に通い始めてプライドが高くなっていった (OPP1【受験】)。塾の方が話が合う友達が多く, 楽しかった (SD【塾の方が楽しい】)。E さんは厳しいバスケットボール部に入ったことで変化が起こった (BFP2【バスケットボール部に入る】)。練習の厳しい部活だったが, 鍛えられた (SG【厳しい部活で鍛えられた】)。E さんは「根性がついた」と語っている。部活を頑張っていたので受験を乗り越えることができた (OPP1【受験】)。

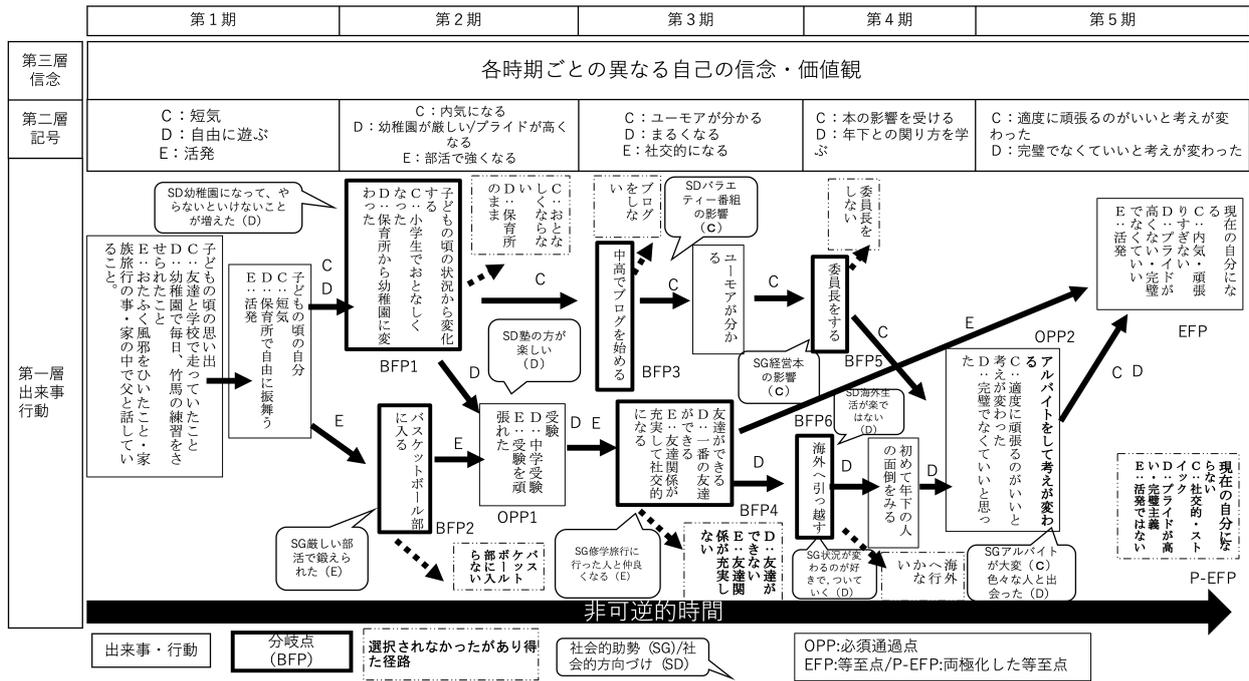
以上の経緯から第二層は C さんは〈内気になる〉, D さんは〈幼稚園が厳しい/プライドが高くなる〉, E さんは〈部活で強くなる〉とした。

c) 第 3 期 内気だった C さんは中高一貫校に通うようになり, その頃にブログを書くようになった。内気だったが, ネットで自分の言いたいことを書いていた (BFP3【中高でブログを始める】)。その頃からバラエティー番組を見た影響で面白さが何か分かる, すなわちユーモアが分かるようになった (SD【バラエティー番組の影響】)。D さんは一番仲のいい友達ができる, E さんは友達との交友関係が充実して社会的になるなど, 友達ができるという経験をしている (BFP4【友達ができる】)。プライドが高かった D さんは第一志望の学校に合格した後, 一番仲のいい友達ができただけでプライドが高くなっていった。D さんは「だんだん, まるくなった」と語った。E さんは修学旅行に行ったクラスメイトと友達になったことがきっかけで社会的になり, 多くの人としゃべることができるようになった (SG【修学旅行に行った人と仲良くなる】)。以上の経緯から第二層は C さんは〈ユーモアが分かる〉, D さんは〈まるくなる〉, E さんは〈社会的になる〉とした。

d) 第 4 期 E さんは第三期までしか時期がなかったため, この時期以降は C さんと D さんの径路のみが TEM 図に示されている。C さんは委員会で委員長をするようになった (BFP5【委員長をする】)。これは当時, 読んでいた経営本に影響を受けたからであった (SG【経営本の影響】)。委員会のメンバーのモチベーションを上げるためにクリスマスカードを送るなど工夫をしていた。このことから C さんは他から自分が影響を受けやすいことを語った。D さんは親の仕事の都合で海外に引っ越しをすることになった (BFP6【海外へ引っ越し】)。D さんは状況が変わっていくのが好きであるため, 仕事先の海外について行くことにした (SG【状況が変わるのが好きで, ついていく】)。しかし, 好きでついて行った海外では, 日本と生活様式が異なるため, 思っているよりも生活は楽ではなかった (SD【海外生活が楽ではない】)。また, 海外の学校で年下の同じ日本人の学生の面倒をみるようになり, 初めて年下の人との関わり方を学んだ。以上の経緯から第二層は C さんは〈本の影響を受ける〉, D さんは〈年下との関わり方を学ぶ〉とした。

e) 第 5 期 C さんと D さんはアルバイトをすることを通して考え方が変わるという経験をした (OPP2

図2 Cさん・Dさん・EさんのTEM図



【アルバイトをして考えが変わる】。Cさんは今までストイックに勉強などを頑張っていたが、アルバイトで働いてしんどくなるという経験をしたため、考え方が変わった。(SG【アルバイトが大変】)。Dさんは今までは完璧主義で、完璧にできない場合はあらかじめしていたが、アルバイトで様々な立場の人と出会ったことで、完璧でなくてもいいと考え方が変わった(SG【色々な人と出会った】)。以上の経緯から第二層はCさんは「適度に頑張るのがいいと考えが変わった」、Dさんは「完璧でなくていいと考えが変わった」とした。第三層は各時期ごとに異なる自己の信念・価値観について語っていたので、「各時期ごとの異なる自己の信念・価値観」とした。

(3) 辛い時期があり、それを乗り越えたとき肯定的に意味づけたことを語る BさんとJさんの事例

a) Bさん第1期：自分に自信がない 最も幼い頃の思い出として、保育園の友達と目が合った記憶を語ったが、それは一瞬のモノクロの風景のような一場面の記憶であり、それしか覚えていないと語った。

保育園から小学校低学年までのBさんは本を読むのが好きで、気が弱い大人しい子どもだった。他の子どもからきついことを言われても言い返すことができなかった。「小2ぐらいまではずーっと本当にただ、おとなしい子って感じていたね」と語った。このような自己につ

いて「自分いけてない」と語っており、自分に自信が持てない時期とBさんが捉えていると考えられる。そのため第二層は「自分に自信がない」とした。

b) 第2期：自分に自信がつく 自分に自信がつくようになったのは、サッカーを始めることがきっかけになった。小学生になってサッカーをするようになり、活発になった(BFP1【サッカーを始める】)。サッカーの練習は厳しいと語っており(SD【サッカーの練習が厳しい】)、続けるのが大変な面もあったが、その厳しい練習に鍛えられ、打たれ強くなり、学校生活も楽しくなったと語った。この時期から「特に記憶が鮮やかになってくる」と語っている。自分に自信が付き始め、勉強もテストで満点が取れ、サッカーで体力がついているので体育の授業もできるようになった。サッカーを始めたことをきっかけに自分に自信が持てるようになったとBさんは捉えていると考えられる。そのため第二層は「自分に自信がつく」とした。

c) 第3期：自由に振る舞えない 自己主張ができるようになり、自信がついたBさんだが、中学生になり、通い始めた中学の校則が厳しく(SD【校則が厳しい】)、制服を着たくないのに、着なければならないことで、締め付けられていると感じ、人と話せなくなってしまふ(BFP2【人としゃべれなくなった】)。一度、自己

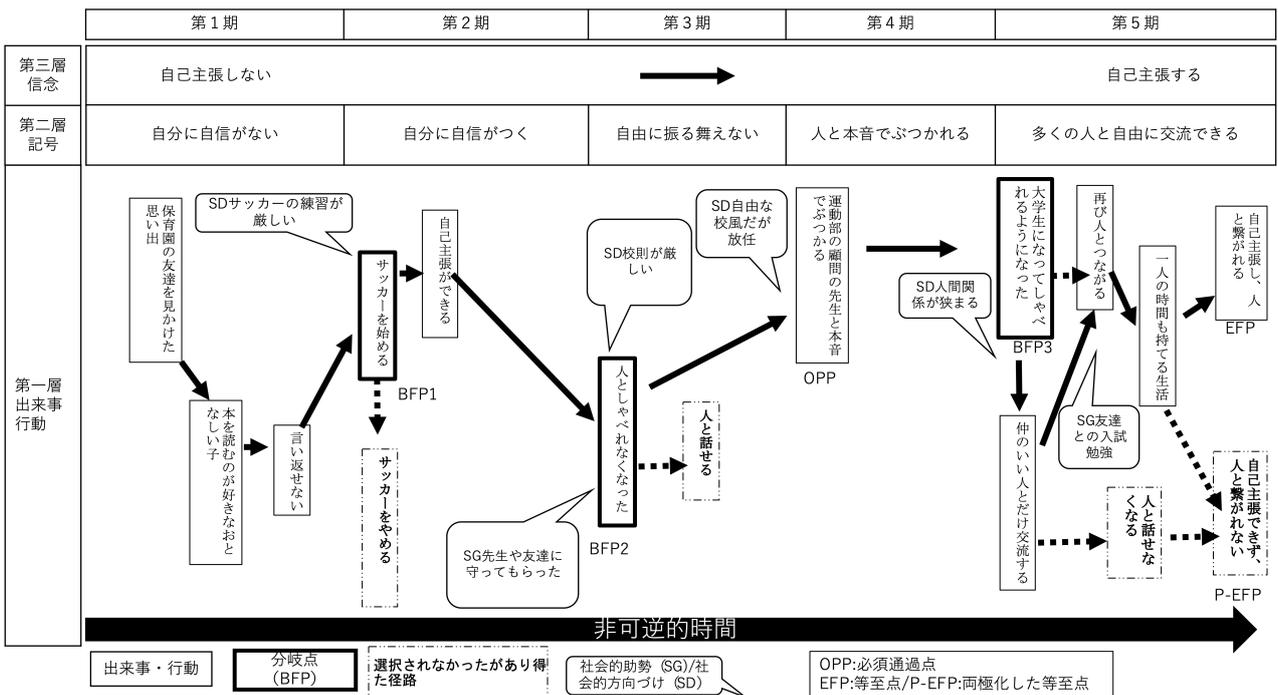
主張ができるようになった B さんだが、厳しい中学に通うようになるという環境の変容で、自由に振舞うことができず、再び自己主張ができなくなってしまったと考えられる。そこで第二層を〈自由に振る舞えない〉とした。中学の環境の変容を締め付けている、閉ざされていると語っていた。一方、この時期は先生や友達など周りの人がいい人ばかりで、「守られながら育っていった」と語っており (SG【先生や友達に守ってもらった】)、大変な中学時代にもポジティブな面があったと捉えている。

d) 第 4 期：人と本音でぶつかる 高校生になると、自由な校風の高校に通えるようになり、中学と比べ自由に振る舞えるようになった。一方で守ってもらえるという雰囲気はなくなり、先生は放任するようになったと感じた (SD【自由な校風だが放任】)。「自分でちゃんとしないといけないという気持ちに、わりと最初の頃からなっていたのはありますね」と語った。その頃、運動部に入ったが、顧問の先生と意見が食い違い、先生と本音でぶつかることもあった (OPP【運動部の顧問の先生と本音でぶつかる】)。中学生の自分までなら部活を辞めていたかもしれないが、当時は反骨心があったので続けた。高校が自由な校風で周りの人の支えが少なくなったため、自分で頑張ろうと決意し、再び、自己主張ができるようになった。小学生の頃の厳しいサッカーの

練習を続けたように、厳しい運動部を続けており、たんに自己主張できるだけでなく本音でぶつかり合えるように、より強く成長している。そのため、第二層は〈人と本音でぶつかる〉とした。

e) 第 5 期：多くの人と自由に交流できる 大学生から大学院生になった現在までは、ただ本音で人とぶつかるだけではなく、多くの人とつながりを持ち、交流が持てるようになってきている。大学生になった始めは、多くの友達と話していたが (BFP3【大学生になってしゃべれるようになった】)、学年が上がるにつれて、仲のいい人とだけ交流するようになった (SD【人間関係が狭まる】)。大学院の入試の勉強を友達とできるようになり (SG【友達との入試勉強】)、再び、友達と話すようになった。現在については、多くの人と交流し、つながれるようになったと語っている (EFP【自己主張し、人と繋がれる】)。一方で、一人でいることも好きなため、一人でいる時間も持っている。この時期では人とぶつかるのではなく、多くの人と自由に交流するようになってきている。B さんは人と自由に交流できるようになったのは、今までの人とつながる経験の積み重ねがあったからと語っている。人と本音でぶつかるようになった後に、人と話せるようになったり、人と話せなくなったりする状況を行き来しながら、少しずつ人とつながれるように意味づけが

図 3 B さんの TEM 図



移り変わっている様子が見られる。そのため、第二層は〈多くの人と自由に交流できる〉とした。第三層は自信を持って自己主張するようになる移り変わりを示していたので〈自己主張しない→自己主張する〉とした。

a) Jさん第1期：活発 最も幼い頃の思い出は父と川遊びに行ったこと、家族との海外旅行、バレエ、バイオリン、空手と多くの習い事をしてきた記憶を語った。その記憶から幼い頃の自分はとても活発だったと語った。外遊びでも周りの子どもたちを引っ張っていた。そこで第二層は〈活発〉とした。

b) 第2期：周りを気にする 小学校低学年の担任の先生が厳しく（SD【担任の先生が厳しい】）、周りをよく見るように注意されたことから（BFP1【小学校の担任の先生に注意された】）、周りを見るようになった。同時期にお父さんから同じように注意され（SD【父にも注意された】）、自分も周りを見た方がいいと感じるようになり、周りの人を気にするようになった。その後、高学年で転校をしたが、仲のいい人同士の集団が出来上がっていて、輪に入りづらかった（SD【居場所にはならなかった】）。仲のいい友達はできたが、居場所にはならなかったと語った。Jさんは先生とお父さんに注意されたことから、周りを見るように変わったため、第二層は〈周りを気にする〉とした。

c) 第3期：生き生きしていない 小学校高学年で転校をした後、骨折をしたJさんは大好きだった運動が自由にできなくなってしまった。（BFP2【骨折して運動が出来ない】）「運動が自分のアイデンティティみたいな感じだった」と語るJさんにとって、骨折して運動が出来なくなったこの時期は「全然、生き生きしていない」期間だった。中学生になってからも、本を読んで一人で過ごすことが多く、静かに過ごしていた時期だった。暗くて長いイメージの期間だと語った。そのため第二層は〈生き生きしていない〉とした。

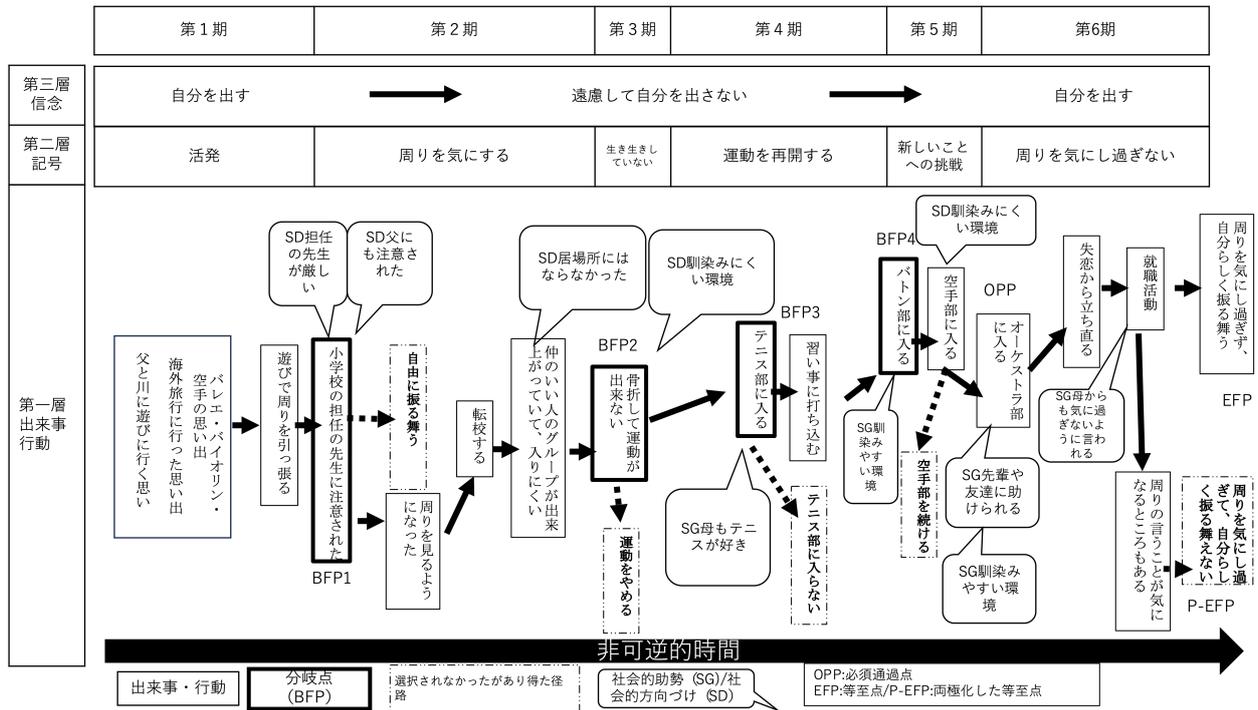
d) 第4期：周りを気にしながら自分らしく振る舞う 中学生でテニス部に入ったことがきっかけで（BFP3【テニス部に入る】）、自分らしく振る舞えるように変わっていった。テニス部の中で友達とにぎやかに過ごした。自分はテニスをしたことがなかったが、お母さんがテニスが好きなので（SG【母もテニスが好き】）、テニス部に入った。「周りもちょっと気にしつつ、静かな時代から

ちょっと動く時代になったかな」と語っている。この時期は動き始める時期ということで習い事であるバレエ、バイオリン、空手にも打ち込んでいることが語られている。この時期は周りを気にしていながらも、自分らしく振る舞おうとし始めている。そのため、第二層は〈運動を再開する〉とした。

e) 第5期：新しいことへの挑戦 高校生になると、高校にはJさんと同じように習い事をしてきた人が多く、価値観の同じ人が多いことに気付いた。そこで全く経験のなかったバトン部に入部した。（BFP4【バトン部に入る】）他の運動部と迷ったが、「全く新しいことにチャレンジするのもいいかな」と思ったと語った。入ってみると、バトンが面白く、踊るのが好きという新しい自己に気付いたことも語った。学校生活は楽しくなり充実していた一方で、進学校に通っていたため勉強が難しくなり、その面では自信がなくなると語った。課題の量が多く、休日も朝から自習室に行って勉強していた。この時期は勉強の大変さはあるが、自分らしく振る舞う中でバトン部という新しい部活に挑戦し、踊ることが好きという新しい自己を見つけている。そこで第二層は〈新しいことへの挑戦〉とした。

f) 第6期：周りを気にしすぎない 大学生で空手部に入っていたが、練習が厳しすぎたため、両親に別の部活にするよう勧められ、オーケストラ部に入った（OPP【オーケストラ部に入る】）。オーケストラ部に入った時は先輩が気にかけてくれ、部活の人たちと遊ぶようになった（SG【先輩や友達に助けられる】）。大学生活でホームシックだったこともあるが、それも部活のおかげでなくなった。学年が上がって部活で役職に就き、バイオリンの練習に没頭するようになった。また、記念の演奏会に向けて一生懸命、練習するようになった。失恋して辛い時期もあったが、いつまでもふさぎ込んでいるのもおかしいと思うようになり、吹っ切れるようになった。現在はだんだんと、周りの人の言うことを気にしなくなっている。母親にも周りから言われたことを気にしすぎないように言われていた（SG【母からも気にし過ぎないように言われる】）。就職活動の面接などで圧迫面接があってもいちいち気にしているのは、きりが無いと思うようになった。周りを気にするところは今もあるが、気にするのは悪いことでもないと言った。「大学入ってその人のいうこと気にしないじゃないけど、なんか割り切れるようになったのはめっちゃ大きい気がします。なんか言ってることも客観的意見の一つみたいな。ちょっと

図4 JさんのTEM図



と落ち着いたら考えられる。だから前みたいに一人で考え込んだりしない」と語っている。周りを気にするところはあるつつも、少しずつ、割り切れるように意味づけが移り変わっている様子が見られる (EFP【周りを気にし過ぎず、自分らしく振る舞う】)。そのため、第二層は「周りを気にしすぎない」とした。第三層は始めは自分を出していたが、自分を出せない期間を経て、再び自分を出せるようになるので「自分を出す→遠慮して自分を出さない→自分を出す」とした。

また、本研究の面接を通して自己のことを語ったことで、Jさんには、価値観の同じ人の多い高校と、オーケストラ部のような馴染みやすい環境と、中学や空手部のような馴染みにくい環境があることに気付いたことも語った (SG【馴染みやすい環境】) (SD【馴染みにくい環境】)。そのようなことを今まで考えたことがなく、語りながら気づいた。自己について語りながら、新しい自己に気付いたと考えられる。

2 過去の出来事を振り返らない協力者の事例

過去の出来事を振り返らない協力者4人の事例は語りが少ない協力者もいたため、分かりやすくTEM図を示すため、分類ごとにTEM図を示すのではなく、4人で

一つのTEM図にまとめて示した。

(1) 第1期

FさんのEFPは【落ち着いた】、GさんとIさんのEFPは【大人になる】、HさんのEFPは【おとなしい】で、FさんのP-EFPは【落ち着きがない】、GさんとIさんのP-EFPは【大人にならない】、HさんのP-EFPは【活発】であった。最も幼い頃の思い出はFさんは家族におむつを替えてもらっているところ、Gさんは虫取りをしたこと、Hさんは登り棒で遊んだこと、冬は朝に乾布摩擦をやっていたこと、Iさんは友達と外で遊んでいたことを語った。第1期ではそれぞれの子どもの頃の自分について語った。Fさん、Hさん、Iさんは子どもの頃はやんちゃ、活発であることを語った。Gさんは子どもの頃の自分については「分からない」と語った。そこでFさん、Hさん、Iさんの第二層は「子どもの頃は活発・やんちゃ」とした。

(2) 第2期

Iさんは子どもの頃は活発で外遊びをすることも多かったが、次第に外遊びが減った (BFP1【外遊びが減る】)。これは友達が外遊びをせず、ゲームをするなど室

内遊びをすることが多いことが影響した (SG【友達が外遊びをしない影響】)。FさんとHさんは野球を始めたことを語った (BFP2【野球を始める】)。Fさんは子どもの頃はやんちゃで落ち着きなかったが、厳しい野球の練習を始めて、落ち着いたと語った (SG【野球が厳しい】)。Hさんは野球を始めて、礼儀を学んだと語った (SG【野球で礼儀を学んだ】)。Gさんは受験をして成長したと語った (OPP1【受験】)。以上の経緯から第二層はFさんとHさんは〈おとなしくなる〉、Gさんは〈受験で成長した〉、Iさんは〈外で遊ばなくなる〉とした。

(3) 第3期

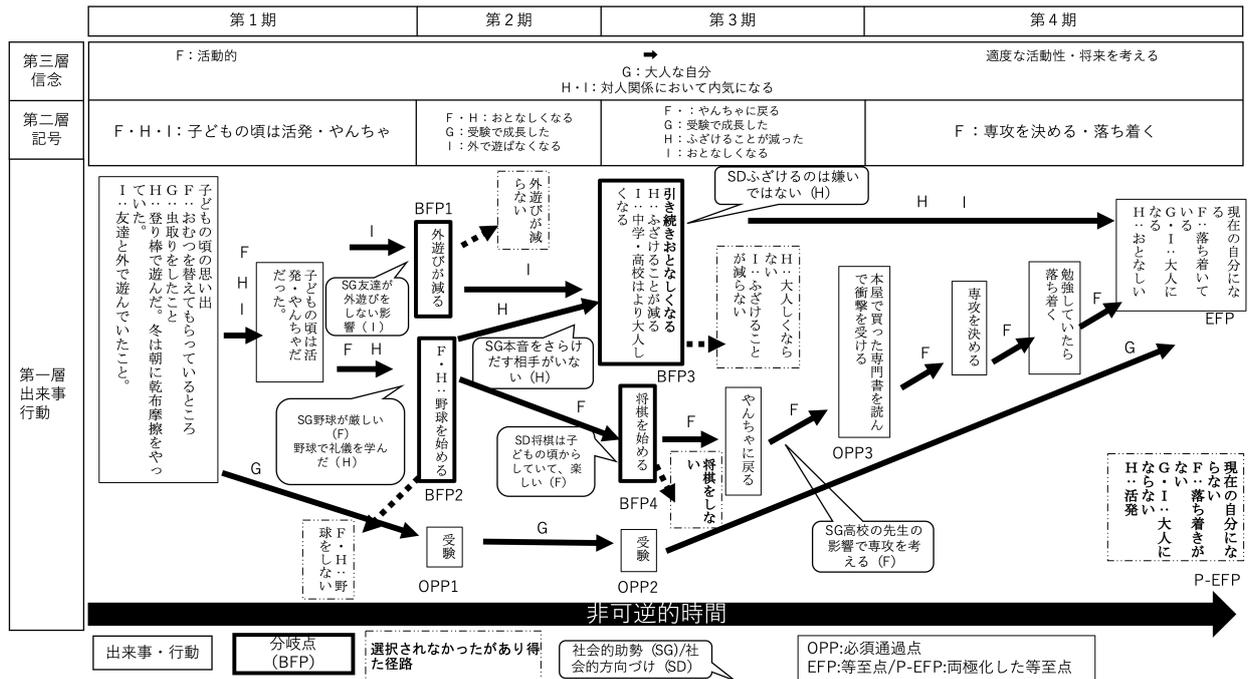
HさんとIさんは前の時期から引き続き、おとなしくなったことを語った (BFP3【引き続きおとなしくなる】)。Hさんは学校で冗談を言ったりふざけることがあり、現在もふざけることは嫌いではないが、本音を出す友達がいないため、ふざけることが減りおとなしくなったと語った (SG【本音をさらけ出す相手がない】) (SD【ふざけるのは嫌いではない】)。Iさんは中学生、高校生の頃は更におとなしくなったと語った。Fさんは野球をやめて将棋を始めた (BFP4【将棋を始める】)。Fさんは子どもの頃に将棋をしていたので、将棋をする方が楽しく感じた (SD【将棋は子どもの頃からして、楽しい】)。また、このころ、やんちゃに戻った。Gさんは受

験をして成長したと語った (OPP2【受験】)。二度の受験で成長をしたことだけを語った。以上の経緯から第二層はFさんは〈やんちゃに戻る〉、Gさんは〈受験で成長した〉、Hさんは〈ふざけることが減った〉、Iさんは〈おとなしくなる〉とした。

(4) 第4期

第4期はFさんだけしかなかったため、Fさんの径路のみを示した。Fさんは高校の先生に影響を受けて現在の大学の専攻である文学に興味を持つようになった (SG【高校の先生の影響で専攻を考える】)。その後、大学生になって友達と本屋に行って、偶然買った文学の専門書を読んで内容に衝撃を受け、文学を専攻にしようと本格的に決めた (OPP3【本屋で買った専門書を読んで衝撃を受ける】)。大学生になってからは専門の勉強に一生懸命に取り組んでおり、落ち着いてきたと語った。以上の経緯から第二層は〈専攻を決める・落ち着く〉とした。第三層はFさんは〈活動的→適度な活動性・将来を考える〉、Gさんは〈大人な自分〉、HさんとIさんは〈対人関係において内気になる〉とした。

図5 過去の出来事を振り返らないと回答した協力者のTEM図



考察

過去の出来事を振り返ると答えた 6 名の協力者と過去を振り返らないと答えた 4 名の協力者の事例を通して、どのような自伝的推論の過程が見られたかを考察する。

1 過去の出来事を振り返ると回答した協力者の自伝的推論の過程

本研究では自伝的推論の過程を TEA で捉えることを目的とした。第一層で経験した出来事や行動の移り変わりを記述し、第二層で自伝的推論による意味づけを捉え、第三層で自伝的推論による意味づけが自己の価値観や信念にどう影響するかを捉えた。

「対人関係の変化を語る」A さんと「辛い時期があり、それを乗り越えたと肯定的に意味づけたことを語る」B さんと J さんの事例からは、第二層で自伝的推論による意味づけが繰り返され、第三層で一貫して、同じ自己の価値観や信念の捉え方が移り変わる様子が見られた。

まず、第二層で見られた自伝的推論の意味づけの内容について述べる。A さんは第 2 期で転校したことで幼なじみと離れ、更に転校先で話しかけてもらったことを、対人関係を広く持つきっかけの出来事として意味づけていた。これは起こった出来事を転機と意味づける自伝的推論である（佐藤，2014）。

B さんは第 2 期で厳しいサッカーの練習で鍛えられ、自信がついたと語った。これはある出来事がきっかけで人としての強さを獲得した成長と意味づける自伝的推論である（佐藤，2014）。

J さんは第 2 期で先生やお父さんに周りを見るように注意されたことで周囲を気にするようになった。これはある出来事から教訓を学ぶ自伝的推論の意味づけと考えられる。第 3 期で骨折して自分のアイデンティティであった運動ができなくなったと語った。これはその出来事が自分にとって否定的な影響を与えたと意味づける自伝的推論と考えられる（佐藤，2014）。第 5 期で新しい部活であるバトン部に挑戦したことで、踊るのが好きという新しい自己に気付いた。新しい自己の在り方に気付くのはパスパティとウィークス（Pasupathi & Weeks, 2011）の自己の変容を意味づける自伝的推論の働きと同じである。

自伝的推論によって意味づけが第二層の各時期で起こ

り、第三層の一貫した同じ自己の価値観や信念での移り変わりに影響したのではないかと考えられる。

「時期ごとに思いついた自己を語る」C さん、D さん、E さんは第二層で自伝的推論による意味づけを繰り返しているが、第三層で言及されているのは時期ごとに全く異なる、自己の価値観や信念である。

C さんは第 3 期でバラエティー番組を見た影響でユーモアが分かるようになった、第 4 期では経営本の影響で委員長をするようになった、第 5 期でアルバイトをして適度に頑張るのがいいと考えが変わったと語っているが、これはいずれもある出来事が自分の考え方に影響したと意味づける自伝的推論である（佐藤，2014）。

D さんは第 3 期で一番仲のいい友達ができることで性格がまるくなったと語った。これは他者への思いやりを学ぶなど、他者との関係における成長を意味づける自伝的推論と考えられる。第 4 期で海外の学校で同じ日本人の年下の学生の面倒をみたことで年下との関わり方を学んだと語った。これはある出来事から何かを学んだと意味づける自伝的推論である。第 5 期ではアルバイトをして様々な人と出会ったことで完璧主義ではなくなったと語った。これはある出来事が自分の考え方に影響したと意味づける自伝的推論である（佐藤，2014）。

E さんは第 2 期で厳しいバスケットボール部で鍛えられ、受験も頑張れたと語った。これは人としての強さを獲得した成長と意味づける自伝的推論と考えられる。第 3 期で修学旅行に行った中で友達ができたとをきっかけに社交的になったと語った。これは他者との関係における成長の自伝的推論と考えられる（佐藤，2014）。

C さん、D さん、E さんは第二層での自伝的推論による意味づけが繰り返され、第三層に反映はされているが、A さん、B さん、J さんのように一貫した自己の信念や価値観の捉え方が移り変わる様子が見られなかった。

過去の出来事を振り返ると回答した協力者には一貫して同じ自己の信念・価値観が移り変わる協力者と時期ごとに全く異なる自己の信念・価値観を語る協力者が見られた。出来事に対し自伝的推論によって意味づけし、全体として 1 つの自己の信念・価値観に結びつけて語る場合と出来事に対して自伝的推論によって意味づけし、それに対応する異なる自己の信念・価値観と結びつける場合があるのではないかと考えられる。

2 過去の出来事を振り返らないと回答した協力者の自伝的推論の過程

過去の出来事を振り返らないと回答した4名の協力者のうち、Gさんは語りそのものも少なく、二度の受験を通して成長したとは語っているが、どのように成長したかなどの詳細な語りはなかった。どんな自分だったかという問いにも「分からない」と語っていた。成長したという意味づけは佐藤（2014）の示した自己と出来事を結びつける自伝的推論のうち、自己に影響したという意味づけと一致している。しかし、どう成長したかという語りがなく、ただ成長したと思うと語っていたので、Gさんは自伝的推論による意味づけが他の協力者に比べて弱い事例であると考えられる。

子どもの頃のHさんとIさんは活発だったが、おとなしくなり、その後はずっとおとなしい自分のままになっており、自伝的推論の意味づけが第三層に影響した後は、あまり大きな移り変わりが見られず、同じ価値観や信念が維持されていると考えられる。Fさんは自伝的推論による意味づけを繰り返し行い、それが第三層の自己の価値観や信念の移り変わりに影響をしていると考えられる。

第二層における自伝的推論についてFさんは第2期で厳しい野球を始めてやんちゃだったのが落ち着いたと語った。これは自分が成長したと意味づける自伝的推論と考えられる。第4期で本屋で偶然買った専門書を読んで衝撃を受け、文学を専攻することに決めたと語った。これは専門書と出会ったことを転機と意味づける自伝的推論と考えられる（佐藤，2014）。

Hさんは第2期で野球を学んだことで礼儀を学んだと語っているが、これはある出来事から学んだと意味づける自伝的推論と考えられる（佐藤，2014）。

Iさんは第2期で友達の影響で室内遊びが増えたと語ったがこれは友達の考えが自分に影響したという意味づけのため、自分の考え方に影響したと意味づける自伝的推論と考えられる（佐藤，2014）。

過去の出来事を振り返らないと回答した協力者は、Fさん以外、第三層の移り変わりが少なく、一度、意味づけが第三層に影響した後は、同じ価値観や信念を維持していたり、Gさんのように自伝的推論による意味づけ自体が少ないという事例も見られた。過去を振り返らない協力者は、自伝的推論による意味づけ自体を過去の出来事を振り返ると回答した協力者よりは、頻繁に行ってい

ない可能性も考えられる。また、自己の信念・価値観の移り変わりがあまりないことから、今ある自己の信念・価値観を維持する傾向にあると考えられる。

3 本研究で見られた自伝的推論の特徴

先行研究では指摘されておらず、本研究で複数の協力者に共通して見られた2種類の自伝的推論と思われる意味づけについて述べる。

(1) 辛い時期を乗り越えてポジティブに意味づける

Bさんは一度は第3期で自己主張ができなくなり、第4期で再び自己主張ができるようになっていく。また、再び自己主張ができるようになった第4期は本音で人とぶつかるようになり、以前より強く成長している。辛い時期を乗り越えて、成長したとポジティブに意味づけているのが特徴的である。Jさんも、第2期から第3期の期間は周りを気にするようになり、自分らしく振る舞えなくなったが、第4期のテニス部に入ったことをきっかけに第4期から第6期までで周りに配慮しつつも、自分らしく振る舞えるように成長している。こちらも、辛い時期を乗り越えた後の方が成長していると、ポジティブに意味づけているのが特徴である。

渡邊（2020）はネガティブな経験を意味づける過程では自伝的推論が働いており、そこで肯定的な意味を見出すことができれば、アイデンティティの発達が促されると述べている。渡邊（2020）は量的な研究でこのことを示しているが、同じ自伝的推論の意味づけが本研究で見られたのではないかと考えられる。

(2) 環境の変容を意味づける自伝的推論

Aさん、Bさん、Dさん、Jさんは経験した出来事だけでなく、周りの環境の変容の意味づけをする自伝的推論が起こっている特徴がある。Aさんは第3期で地元の中学校に戻ってきいていたが荒れている雰囲気、周りに馴染めない、第4期で進学した高校が落ち着いた雰囲気だと学校という環境の変容の影響を語っていた。Bさんは第3期で校則の厳しい中学を自由に行動できず締め付けられているが、周りの人に守ってもらえた場所として意味づけている。第4期の高校は自由な場所だったが、先生に守ってはもらえず放任されたという意味づけており、ポジティブな面とネガティブな面の両面から環境の変容

を意味づけている。Dさんは第2期で保育所から幼稚園に変わった時、厳しい幼稚園だったと意味づけていた。Jさんは第2期の転校した先の小学校が居場所にならなかったと意味づけていた。また、面接が終わった後に、馴染みやすい環境と馴染みにくい環境があると語っており、第3期のテニス部に入る前に、一人で過ごしていた頃の中学や第6期の大学の空手部は馴染みにくい環境で、第5期の価値観の同じ人が多かった高校や第6期の大学のオーケストラ部は馴染みやすい環境だったと意味づけていた。

佐藤(2014)とパスパティとウィークス(2011)は自己の安定の意味づけと自己の変容の意味づけを中心に取っており、環境の変容に対する意味づけについては取り上げられていない。周りの環境の変容を意味づける自伝的推論の働きが新たに示唆された。

結論と今後の課題

本研究は自伝的推論を促す半構造化面接を10名の青年に行い、TEAを用いて自伝的推論の過程を検討した。その結果、過去の出来事を振り返ると回答した協力者の自伝的推論の過程から、TLMGの第二層の各時期で自伝的推論による意味づけが起こることで、第三層の自己の価値観・信念にまで意味づけが影響するような過程が見られた。一貫して、同じ自己の信念・価値観が移り変わる過程を語る協力者と時期ごとに全く異なる自己の信念・価値観を語る協力者が見られた。過去の出来事を振り返らないと回答した協力者は自伝的推論の意味づけ自体が少ない場合や、自伝的推論による意味づけが自己の価値観・信念に影響した後、その意味づけが変わらず維持される協力者が見られた。また、辛い時期を乗り越えて成長するというポジティブに意味づける自伝的推論や環境の変容を意味づける自伝的推論も新たに見られた。TEAを用いて分析したことで、ここまで詳細な自伝的推論の過程を検討することができた。自伝的推論の過程を捉えるために、TEAは極めて有効な手段である。

今後は転機の語りの自伝的推論など、急激に自己の変容が起こっている人の自伝的推論の過程などもTEAを用いて調査することで新しい自伝的推論の過程について、より理解が深まると考えられる。

引用文献

- 福田茉莉(2022) TEA(複線径路等至性アプローチ)の基本的概念. 安田裕子・サトウタツヤ(編), TEAに対する対人援助プロセスと分岐の記述——保育, 看護, 臨床・障害分野の実践的研究(pp. 2-12). 誠信書房.
- Habermas, T., & Bluck, S. (2000) Getting a life: The emergence of the life story in adolescence. *Psychological Bulletin*, 126 (5), 748-769.
- Habermas, T. (2011) Autobiographical reasoning: Arguing and narrating from a biographical perspective. *New Directions for Child and Adolescent Development*, 131, 1-17.
- 家島明彦(2012) マクアダムスのナラティブ・アイデンティティ. 梶田叡一・溝上慎一(編), 自己の心理学を学ぶ人のために(pp. 63-72). 世界思想社.
- 川口潤(1999) 自伝的記憶. 中島義明・安藤清志・子安増生・坂野雄二・繁榎算男・立花政夫・箱田裕司(編), 心理学辞典(p. 354). 有斐閣.
- McAdams, D. P. (2001) The psychology of life stories. *Review of General Psychology*, 5, 100-122.
- 中園佐恵子(2022) ストーリーを構成する自伝的推論の働き——自伝的記憶と自己に着目して. 神戸大学大学院人間発達環境学研究科研究紀要, 15 (2). 19-26.
- Pasupathi, M., & Weeks, T. L. (2011) Integrating self and experience in narrative as a route to adolescent identity construction. In Habermas, T. (Ed.), *The development of autobiographical reasoning in adolescence and beyond*. *New Directions for Child and Adolescent Development*, 131, 31-43.
- 佐藤浩一(2008a) 自伝的記憶の構造と機能. 風間書房.
- 佐藤浩一(2008b) 自伝的記憶の機能. 佐藤浩一・越智啓太・下島祐美(編), 自伝的記憶の心理学(pp. 60-75). 北大路書房.
- 佐藤浩一(2008c) 私の構造——自伝的記憶の構造. 仲真紀子(編), 自己心理学4 認知心理学へのアプローチ(pp. 152-169). 金子書房.
- 佐藤浩一(2014) 自伝的推論——概念ならびに評価方法の整理と包括的な枠組みの提案. 群馬大教育学部紀要 人文・社会科学編, 63, 129-148.
- 佐藤浩一(2017) 成功経験と失敗経験に対する自伝的推論とアイデンティティ発達, 適応との関連. 認知心

心理学研究, 14, 69–82.

佐藤浩一・清水寛之 (2012) 中学校時代の教師に関する自伝的記憶——日常的な出来事に対する自伝的推論の検討. 認知心理学研究, 10, 13–27.

サトウタツヤ (2017) TEA (複線径路等至性アプローチ) とは何か. 安田裕子・サトウタツヤ (編), TEM でひろがる社会実装——ライフの充実を支援する (pp. 1–25). 誠信書房.

サトウタツヤ (2022) TLMG (発生の三層モデル) ——価値と行為を媒介する記号の働きに注目する. 安田裕子・サトウタツヤ (編), TEA に対する対人援助プロセスと分岐の記述——保育, 看護, 臨床・障害分野の実践的研究 (pp. 28–42). 誠信書房.

サトウタツヤ・福田茉莉・安田裕子 (2015) TEA の実践. 安田裕子・滑田明暢・福田茉莉・サトウタツヤ (編), TEA 実践編——複線径路等至性アプローチを活用する (pp. 4–59). 新曜社.

豊田香 (2015) 専門職大学院ビジネススクール修了生による生涯学習型職業的アイデンティティの形成——TEA 分析と状況的学習論による検討. 発達心理学研究, 26 (4), 344–357.

渡邊ひとみ (2020) 青年期のアイデンティティ発達とネガティブ及びポジティブ経験に見出す肯定的意味. 心理学研究, 91 (2), 105–115.

安田裕子・サトウタツヤ・荒川歩 (2012) TEM 入門編——丁寧に, そして気楽に (楽に雑にはダメ). 安田裕子・サトウタツヤ (編), TEM でわかる人生の径路——質的研究の新展開 (pp. 2–48). 誠信書房.

発行: TEA と質的探究学会

Japanese Association of TEA for Qualitative Inquiry

<https://jatq.jp/index.html>

 JATQ

編集・制作協力: 特定非営利活動法人 ratik

<https://ratik.org>

 ratik